

TSUNAMI

災害の国から

②ボランティア

の中年男性は、泥まみれの右足に15センチの切り傷を負っていた。

「このまま縫うけど大丈夫。痛くないですよ」

兵庫県災害医療センターに勤める医師の富岡正雄さん(41)は、傷口の泥を歯ブラシで洗い落とし、励ました。

大津波を受け、国際協力機構(JICA)の緊急援助隊医療チーム約20人は、12月30日から村で診療を続けている。

スリランカ東海岸、カルムナイの小学校の図書館は、数十人の被災者でひしめいていた。ベッド

師4人が交代で連日100人以上を診ている。

海岸から100メートル以上打ち上げられた船。押し

現場重ね、育つ人材

トルコで起きた4回の大地震で被災地を経験した。カルムナイの惨状と、

JICAから要請を受け、現場との違いに驚いた。

津波が発生した26日、スリランカとモルディブ

援助隊に初めて加わった6年前と比べ、ロジスティックス(後方支援業務)が格段に充実した。

約150人を派遣した。兵庫県災害医療センター

ドネシアが日本に援助を要請してきた。日本は救助チームや医療チーム計

のとき、米国は総勢200人。専門の調理師も抱えていた。軍の輸送機で

現地入りしたウクライナは、病床40床、レントゲンや分娩室もある設備を持ち込んだ。

国際医療ボランティア「AMDA」(本部・岡山市)は現在、スリランカとインドネシア、インドに医師と現地スタッフ

ら約70人を派遣している。今後はさらにスタッフを増やし、巡回診療を続けながら復興の手伝いもする予定だ。NGO

各地で経験を積み、志の高い多彩な人材が育っている。

センター代表理事の熊岡路矢さん(57)は「被災地での緊急援助医療は、欧米ではNGOが担い、医師も3カ月前後の休みを取って参加するのが一般的。日本もこうした環境になれば、援助の効率は一層、上がる」と話す。

流されて跡形もなくなっただけの26日夜。現地行きの即決し、早朝には成田空港に向かった。

「いち早く現地に行けば、多くの被災者を助けたい。インターネッ

島市は、コロナピアや

にも感謝され、日本の国

く進んだ。

24人で現地に入った。そ

NGO(非政府組織)

食料や衣類、薬品を配つ

一層、上がる」と話す。

4 政治・総合

7 9 国際

10 10 経済

13 14 金融情報

19 スポーツ

21 囲碁・将棋

21 26 小説

22 23 文化

25 科学・医療

26 27 生活

28 29 地域

30 31 オピニオン・声

20 21 BSデジタル・ラジオ